



Title	『デュランデ城』における風景描写のダイクシス（その4）
Author(s)	瀧田, 恵巳
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85030
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『デュランデ城』における風景描写のダイクシス（その４）

瀧田恵巳

4.3.12. hinein

hinein に関しては、全 9 例中 2 例が風景描写に該当するが、hin-の用例全体においても風景描写はこの 2 例のみである。残り 7 例の内訳は、人物の移動が 5 例、見る動作が 1 例、発話行為が 1 例である。

風景描写に関しては、光の描写と音の描写が各 1 例見られる。例(62)の「きらきらと光が差し込む hineinfunkeln」という分離動詞は、空に輝く星から菩提樹の梢越しに小窓を通じて屋内に光が差し込む方向を表すことにより、外から屋内に至る広範囲の風景に関わっている。例(63)は先述の hinaus の例(53)に続く情景描写である。銃を撃ち放つ方向を表す hinaus に対して、hinein は、その時に起こった叫び声 Geschrei や呼ぶ声 Rufen、散発する銃声 Flinterschüsse が峡谷の中にまで響き渡る方向を表す。

(62) Bald darauf traf der Namenstag der Priorin, ein Fest, worauf sich alle Hausbewohner das ganze Jahr hindurch freuten; [...] Da verbreitete sich, als der Morgenstern noch durch die Lindenwipfel in die kleinen Fenster hineinfunkelte, schon eine ungewohnte, lebhafte Bewegung durch das ganze Haus, [...] (SD:14)

その後しばらくして、尼僧院長の聖名祝日がやってきた。それは修道院中の人みなが、一年中待ちに待った日だった。(中略) まだ暁の明星が菩提樹の梢ごしに、小窓のなかへきらきらとさしこんでいるころから、修道院には、いつにない活気がみなぎっていた。(省略) (188)

(63) [≥(53)] „Der Rasende!“ sagte er und befahl für jeden Fall die Zugbrücke aufzuziehen, dann öffnete er rasch das Fenster und schoß ein Pistol als Antwort in die Luft hinaus. Da gab es einen wilden Widerhall durch die stille Nacht, Geschrei und Rufen und einzelne Flintenschüsse bis in die fernsten Schlünde hinein, und als der Graf sich wieder wandte, sah er in dem Saal einen Kreis verstörter Gesichter lautlos um sich her. (SD:37)

「きちがい奴！」罵りながら彼は、ともかくも城のはね橋をひき上げておくよう命じ、すばやく窓をあけて、返答のピストルを空へ撃ちはなった。すると、荒々しい反響がわき上がり、叫び声や呼びかわす声、散発する銃声などが静かな夜をつらぬいて、はるか遠くの峡谷までもひびきわたった。伯爵がふりかえったとき、広間には何人ものうろたえた顔が声もなく彼を囲んでいた。(214)

二つの風景描写について、hinein の示す方向の起点側への Hier/Origo の導入は極めて難

しい。例(62)において場面の中心は、hinein の示す方向を起点側である「暁の明星 Morgenstern」に留まるのではなく、その光が菩提樹の梢を通り抜け、小窓に差し込む先の修道院内へと移行する。例(63)については、当初場面の中心は確かに登場人物 er (伯爵 Graf) にある。しかし音響が峡谷まで響き渡る様は、er のいる起点側ではなく、目標側にいて初めて認識しうるものである。このように二つの風景描写の事例において、場面の描写は起点側に位置する存在の視野に限定されず、目標側に至るまで拡張された光景へ発展している。従って Hier/Origo を hinein の方向の起点側に導入することは極めて難しい。

ここで着目すべき点は、このような風景描写に際して読む側は場面を見渡すような立場に立たされるということである。このような読む側の立場は、既に瀧田 (2019: 28-29) で言及した Ehlich(1985: 253)による読者の Origo、及び瀧田 (2014: 92-93) による聴き手の視点に該当する。つまり例(62)と(63)において読者は現実世界から解放された聴き手として物語場面に介入しつつ、登場人物にも束縛されないことにより超越した立場をとり物語場面を見渡すことができるのである。

人物の移動を表す 5 例のうち、2 例は起点側に Hier/Origo を導入することができるが、3 例についてはその導入は難しい。例(64)の hinein は話し手が自分の家の中に入りたいと申し出る会話文に用いられている。このとき話し手は方向の起点側にいるので、起点側への Hier/Origo の導入は問題なく成立する。その他 4 例の hinein は地の文に用いられる。例(65)の hinein は、それまで場面の中心を担ってきた登場人物 er (レナルト Renald) の移動方向を表すが、その移動は起点側にいる sie によって見送られるため、起点側に Hier/Origo を導入することができる。それに対して例(66)の hinein は、(65)と同様に er (レナルト Renald) の移動方向を表すが、その移動に伴い物語場面も移行することから、er が依然場面の中心であることがわかる。例(67)においても、登場人物 er (伯爵 Graf) が hinein によって示される方向へ移動するのに伴い、場面も移行する。このように例(66)と(67)の場合、hinein の示す方向へ場面の中心そのものが移動するため、その方向の起点側に Hier/Origo を導入することは難しい。例(68)の hinein は「新しい、見たこともない世界 eine neue, ganz fremde Welt」への方向を表す。その目標側の世界はその時点における Gabriele の居場所を描写したもので、Gabriele を中心に描かれていることから、hinein の起点側に Hier/Origo を導入することは極めて難しい。

(64) Als er aber mit klopfendem Herzen auf dem altbekannten Fußsteig immer weiter ging, öffnete sich bei dem Hundegebell ein Fensterchen im Jägerhaus. Es gab ihm einen Stich ins Herz; es war Gabrielens Schlafkammer, wie oft hatte er dort ihr Gesicht im Mondschein gesehen. Heut aber guckte ein Mann hervor und fragte barsch, was es draußen gäbe. Es war der Waldwärter, der heimtückische Rotkopf war ihm immer zuwider gewesen. „Was macht Ihr hier in Renalds Haus?“ sagte er. „Ich bin müde, ich will hinein.“ (SD:29-30)

胸を高鳴らせながらよく知った小道を歩いて行くと、犬の吠声を聞いて猟師小屋の小窓が

開かれた。彼ははっと胸をつかれた。それはガブリエレの寝室の小窓だったのだ。いくたび彼はそこに、月の光をあびたガブリエレの顔を見たことだろう。だがそこから今、一人の男が顔をだし、外にいるのは誰かと無愛想にたずねた。森番の男だ。レナルトは以前からこの狡猾な赤毛の男が大嫌いであった。レナルトは言った。「おまえはレナルトの家で何をしている？俺は疲れている。入って休みたいのだ」 (206)

(65) Er sah so schrecklich aus, sein Haar war grau geworden über Nacht; niemand wagte es, ihm jetzt zu widersprechen. Darauf sahen sie ihn allein rasch und schweigend in das leere Schloss hineingehen, [...] (SD:48)

その顔は見るも恐ろしく、髪は一夜のうちに灰色に変っていた。誰も今、彼に異議を唱える勇氣はなかった。やがて人々は、レナルトがひとり、人気のなくなった城へ足ばやに無言で入って行くのを見た。(226)

(66) Es war ein schöner, blanker Herbstabend, als er in der Ferne Paris erblickte; die Ernte war längst vorüber, die Felder standen alle leer, nur von der Stadt her kam ein verworrenes Rauschen über die stille Gegend, dass ihn heimlich schauerte. Er ging nun an prächtigen Landhäusern vorüber durch die langen Vorstädte immer tiefer in das wachsende Getöse hinein, [...] (SD:19)

遠方に巴里を望んだのは、美しく輝く秋の暮れ方であった。刈入れはとつくに終わり、田畑はどこもがらんとしていた。ただ、街の方角から、静かな野を超えてただよってくる錯綜としたどよめきに、彼はひそかにおののくのくだった。彼は郊外の幾多の壮麗な別荘を通りすぎ、高まりゆく轟音にますます近づいていった。(省略) (194)

(67) Eine Weile starrt' er hin, dann, von Entsetzen überreizt, vergißt er alles andere, und unkennt den Haufen teilend, der wütend nach dem Haupttor dringt, eilt er selbst dem gespenstischen Schlossflügel zu. Ein heimlicher Gang, nur wenigen bekannt, führt seitwärts näher zum Balkon, dort stürzt er sich hinein; [...] (SD:41)

伯爵は、しばらくの間それを見すえていたが、やがて恐ろしさに魅入られたようにわれを忘れ、猛り狂って正面入口へ殺到する群集をかき分けて、見破られることなくあの生霊のいる側翼へと急いだ。彼は少数の者しか知らぬ秘密の廊下に駆けこんだが、それはバルコニーに通ずる近道だった。(省略) (218)

(68) Frische Blumensträuße standen in bunten Krügen am Fenster, ein Kanarienvogel schmetterte gellend dazwischen, denn die Morgensonne funkelte draußen schon durch die Wipfel und vergoldete wunderbar die Zelle, das Betpult und die schwergewirkten Lehnstühle; Gabriele lächelte fast betroffen wie in eine neue, ganz fremde Welt hinein. (SD:9)

窓辺には摘みとったばかりの花々が色とりどりの瓶にいけられてあり、一羽のカナリアがかん高い声で囀っていた。朝日がもう木々の梢をとおしてきらきらとさしそめ、庵室を、祈祷台を、どっしりとした織布の安楽椅子を、不思議な金色の光でみたしていた。ガブリエレは、新しい、見たこともない世界に迷いこんでしまったかのように、ほとんど当惑し

てほほえんでいた。(183)

例(69)の *hinein* は発言動作の方向を表す。発言動作の主体は動作方向の起点側にあるため、ここに *Hier/Origo* は問題なく導入される。例(70)ののぞき込む動作の方向を表す *hinein* も同様に、動作の主体は動作方向の起点側にあるため、*Hier/Origo* は起点側に置かれる。

(69) „Wer ist da?“ rief er auf einmal in den Garten hinein. (SD:45)

「誰だ？」突然彼は庭園の奥に呼びかけた。(223)

(70) Da wand sie sich schnell los. „Mein Gott, liebst du mich denn noch, [...]“ sagte sie voll Erstaunen, die großen Augen fragend zu ihm aufgeschlagen. – Ihm war's auf einmal, wie in den Himmel hineinzusehen. (SD:42)

すると娘はすばやく身をもぎ放した。「まあ、では私をまだ愛して下さっているの？(中略)」彼女は驚きでいっぱいになった目をみはって、いぶかしげに彼を見上げた。―彼は、突然、はるかな空をのぞきこんだような気がした。(219)

以上のように *hinein* の全 9 例には 2 例の風景描写が認められる。また *Hier/Origo* の起点側への導入に関しては、人物移動の 2 例と発言行為 1 例と見る行為 1 例には認められるが、風景描写の 2 例、人物移動の 3 例についてはその整合性が極めて低いことが判明した。

4.3.13. hinüber

hinüber は 1 例のみで人物の移動方向を表し、風景描写に該当する例は見られない。例(71)の *hinüber* は、*hinaus* の例(45) に続く場面で、伯爵 Graf のいる谷間 Tal からドイツ Deutschland への方向を表すことから、起点側の Graf に *Hier/Origo* を導入することができる。

(71) [≥(45)] Weiter erfuhr nun der Graf noch, wie ein Pariser Kommissär das alles so rasch und klug verordnet. Die Nonnen sollten nun in weltlichen Kleidern hinaus in die Städte, heiraten und nützlich sein; da zogen alle in einer schönen stillen Nacht aus dem Tal, für das sie so lange gebetet, nach Deutschland hinüber, wo ihnen in einem Schwesterkloster freundliche Aufnahme angeboten worden. (SD:35)

さらに伯爵は、巴里の人民委員がすべてをいかにすばやくぬけめなく片付けてしまったかを知った。修道女たちは今や僧服を脱ぎ、街に出て結婚し、有用な人間にならねばならぬと命令されたのだ。そこで彼女らはみな、美しい静かなある夜、長年祈りをささげてきたこの谷間を出て、ドイツへと逃れ、その地の姉妹修道院にやさしく迎えられたのだった。(212)

4.4. 分析結果

4.3 では her- と hin- の用例を風景描写とそれ以外に分け、それぞれ Hier/Origo 導入の整合性について検討した。

表 2 は her- と hin- の風景描写とそれ以外の用例数、全用例数、そして総数における割合 (%) を括弧内に表示したものである。全体における風景描写の用例数の割合は、her- は総数 28 例中 6 例で 21.4%、hin- に関しては総数 39 例中 2 例でわずか 5.1% に過ぎず、全体的に決して大きな割合とは言えない。風景描写の総数を比較すると、her- は 6 例、hin- は 2 例で her- の方が多い。語彙別でみると her- は herauf と herüber、hin- は hinein に限定され、herüber は全 3 例とも風景描写であり 100.0% という最も高い割合を占め、次に herauf の 42.9%、最後に hinein の 22.2% が続く。この点から herüber は風景描写の傾向が極めて強いといえる。

	her-	風景描写	それ以外	全用例数	hin-	風景描写	それ以外	全用例数
-ab	herab	0	4 (100.0)	4	hinab	0	7 (100.0)	7
-unter	herunter	0	1 (100.0)	1	hinunter	0	1 (100.0)	1
-auf	herauf	3 (42.9)	4 (57.1)	7	hinauf	0	3 (100.0)	3
-aus	heraus	0	6 (100.0)	6	hinaus	0	18 (100.0)	18
-ein	herein	0	7 (100.0)	7	hinein	2 (22.2)	7 (77.8)	9
-über	herüber	3 (100.0)	0	3	hinüber	0	1 (100.0)	1
合計		6 (21.4)	22 (78.6)	28		2 (5.1)	37 (94.9)	39

表 2 風景描写とそれ以外の用例数（全用例数における割合%）

表 3 は、風景描写の用例について Hier/Origo の導入に高い整合性が認められる用例数と全用例数、そして総数における割合 (%) を括弧内に表示したものである。her- に分類される herauf と herüber については、方向の目標側に Hier/Origo の導入が認められる用例の割合は 66.7% とかなり高い。それに対して hin- の場合、hinein の 2 例において方向の起点側に Hier/Origo を導入することは極めて難しく、その割合は 0.0% である。このように Hier/Origo との整合性は her- と hin- との間で大きく異なる。

	her-	整合性の高い用例数	風景描写の全用例数	hin-	整合性の高い用例数	風景描写の全用例数
-ab	herab	0	0	hinab	0	0
-unter	herunter	0	0	hinunter	0	0
-auf	herauf	2 (66.7)	3	hinauf	0	0
-aus	heraus	0	0	hinaus	0	0
-ein	herein	0	0	hinein	0 (0.0)	2
-über	herüber	2 (66.7)	3	hinüber	0	0
合計		4 (66.7)	6		0 (0.0)	2

表 3 風景描写のうち Hier/Origo 導入の整合性の高い用例数（全用例数における割合%）

表 4 は、風景描写以外の用例に関する Hier /Origo との整合性の高い用例数、および語彙別の全用例数と総数における割合 (%) の数値を括弧内に表示したものである。総数における Hier /Origo との整合性の高い用例数の割合は her-が 54.5%、hin-が 59.5%でともに比較的高い割合を占めている。風景描写の割合 (her-は 66.7%、hin-は 0.0%) と比較すると、her-はやや少ないが、hin-ははるかに高い割合を占めている。語彙別でみると、最も高い割合 (100.0%) を示すのは her-については herunter と herauf であり、風景描写の 66.7%をはるかに凌駕している。hin-については hinüber の割合が 100.0%で最も高く、その後 hinauf (66.7%)、hinaus (61.1%)、hinab と hinein (ともに 57.1%) が続く。この結果は Hier /Origo 導入の整合性の高さが風景描写に限定されないことを示している。

	her-	整合性の高い用例数	風景描写以外の全用例数	hin-	整合性の高い用例数	風景描写以外の全用例数
-ab	<u>herab</u>	<u>1 (25.0)</u>	<u>4</u>	<u>hinab</u>	<u>4 (57.1)</u>	<u>7</u>
-unter	<u>herunter</u>	<u>1 (100.0)</u>	<u>1</u>	hinunter	0	1
-auf	<u>herauf</u>	<u>4 (100.0)</u>	<u>4</u>	<u>hinauf</u>	<u>2 (66.7)</u>	<u>3</u>
-aus	<u>heraus</u>	<u>3 (50.0)</u>	<u>6</u>	<u>hinaus</u>	<u>11 (61.1)</u>	<u>18</u>
-ein	<u>herein</u>	<u>3 (42.9)</u>	<u>7</u>	<u>hinein</u>	<u>4 (57.1)</u>	<u>7</u>
-über	herüber	0	0	<u>hinüber</u>	<u>1 (100.0)</u>	<u>1</u>
合計		<u>12 (54.5)</u>	<u>22</u>		<u>22 (59.5)</u>	<u>37</u>

表 4 風景描写以外のうち Hier/Origo 導入の整合性の高い用例数(全用例数における割合%)

表 5 は、用例全体から見た Hier /Origo 導入の整合性の高い用例数、全用例数、そして総数における割合 (%) を括弧内に表示したものである。総数における整合性の高い用例数の割合は、her-が 57.1%、hin-が 59.0%でともに比較的高い割合を占めている。しかし表 3 と表 4 から明らかなように、Hier /Origo との整合性の高い用例数の内訳は異なる。her-の場合は全体的に風景描写の方がそれ以外の用例よりもやや高い割合を占めるが、hin-については風景描写以外の用例がこの割合を支えている。

	her-	整合性の高い用例数	全用例数	hin-	整合性の高い用例数	全用例数
-ab	herab	1 (25.0)	4	hinab	4 (57.1)	7
-unter	herunter	1 (100.0)	1	hinunter	0	1
-auf	herauf	6 (85.7)	7	hinauf	2 (66.7)	3
-aus	heraus	3 (50.0)	6	hinaus	11 (61.1)	18
-ein	herein	3 (42.9)	7	hinein	4 (44.4)	9
-über	herüber	2 (66.7)	3	hinüber	1 (100.0)	1
合計		<u>16 (57.1)</u>	<u>28</u>		<u>23 (59.0)</u>	<u>39</u>

表 5 Hier/Origo との整合性の高い用例数 (全用例数における割合%)

5. 考察

4.4 の分析結果から考察すると、2 で示した Alewyn(1957/1974)と Ehlich(1985)による見解は、非常に微妙なバランスの上に成立していることがわかる。

まず Alewyn(1957/1974: 221-222)の見解は、Hier「ここ」を導入手段として her-と hin-が頻出し、さらに her-の方が hin-よりも頻繁に用いられるというものであった。この見解は本論文の分析結果したがって、次の二つの観点から考察し、以下の結論が得られた。

第一に風景描写において her-の方が hin-よりも多用されるという Alewyn(1957/1974)の指摘に関しては、本論文の分析においても her-の用例の方が hin-の用例よりも多い(表 1) という結果が得られた。しかし風景描写の事例が見られる語彙は herauf と herüber と hinein に限られ、共通する方向で見るならば、確かに-auf と-über に関しては her-の方が優勢といえるが、-ein に関しては hin-の方が優勢である。

第二に her-と hin-が Hier/Origo の導入手段として用いられ、一方では来る、他方では行くという方向を与えるという指摘に関しては、本論文の分析からいえば、her-に関しては当てはまるが、hin-については当てはまらない。風景描写における Hier/Origo の導入に関する分析結果によると、her-の示す方向の目標側に Hier/Origo が導入される用例数は 66.7%という比較的高い割合を占めるが、hin-の示す方向の起点側に導入される用例数の割合は 0.0%である(表 3)。つまり herauf と herüber の用例については、方向の目標側に存在する知覚主体に Hier/Origo が導入され、遠くからの音響や光の運行を受け止めるような描写がなされる傾向が強いが、hinein の示す方向の起点側には、そこから離れていくような遠近の効果は薄いということが、この分析結果により示されている。

用例数と Hier/Origo との整合性の高さを合わせて考慮するならば、Alewyn(1957/1974)の指摘する風景描写における her-の特徴は、本論文の分析結果からも十分に認められるものの、hin-による風景描写における Hier/Origo の効果を支持する結果は得られなかった。また her-の風景描写を表す残り 2 例にも目標側への Hier/Origo の導入は認められない。

なお風景描写以外の Hier/Origo 導入の整合性の高い用例数については、her-が 54.5%、hin-が 59.5%とともに比較的高い割合を占めている(表 4)。風景描写の割合(her-は 66.7%、hin-は 0.0%)と比較すると her-はやや少ないが、hin-に関してははるかに高い割合を占めている。またそのうち最も高い割合(100.0%)を示すのは herunter と herauf、そして hinüber であり、her-については風景描写の割合 66.7%をはるかに凌駕している。以上の点から考慮すると、Hier/Origo の導入は必ずしも風景描写に特有の現象とは言えない。

Hier/Origo 導入の傾向のみに関係して言えば、Alewyn(1957/1974)だけでなく Ehlich(1985)もまた指摘している。Hier/Origo が her-の目標側及び hin-の起点側に導入されるというこの傾向は、全体的な用例数における該当例の数の割合としては her-が 57.1%、hin-が 59.0%で比較的高い割合を占め(表 5)、ある程度の妥当性が認められる。

その一方で her-の表す方向の目標側及び hin-の表す方向の起点側に Hier/Origo が導入されるとはみなされない用例数の割合は 40%以上を占めている。従って Hier/Origo が her-の

目標側ないし hin-の起点側に導入される傾向は、ある程度の妥当性は認められるものの、her-と hin-の用法全体を網羅するとはいえない。

6. まとめと今後の課題

Eichendorff の作品では her-と hin-が風景描写に多用され、それぞれ Hier/Origo が導入されるという Alewyn(1957/1974)の見解とそれに加わる Ehlich(1985)の見解をうけ、本論文では『デュランデ城』Das Schloss Dürandeにおける her-と hin-の用例を風景描写とそれ以外の用例に分け、全体における割合を算出し、Hier/Origo の導入の整合性を検討した。

本論文の分析結果からいえば、風景描写に関わる Alewyn(1957/1974)の指摘は、her-の hin-に対する優勢と her-における目標側への Hier/Origo の導入に関しては十分に認められるが、hin-における起点側への Hier/Origo の導入については妥当とは言えない。また Hier/Origo の導入は、必ずしも風景描写に特有の現象というわけではなく、風景描写以外の用例においても比較的高い整合性が見られた。さらに風景描写に限定せず用例全体として見ると(表 5)、Alewyn(1957/1974)と Ehlich(1985)の指摘するように、Hier/Origo が her-の目標側ないし hin-の起点側に導入される傾向はある程度認められるが、全体の傾向とするには不十分であるという結論に至った。

以上の本論文の分析の過程では、さらに次の点が明らかになった。

第一に her-と hin-の全用例における風景描写の割合(表 2: her-は総数 28 例中 6 例で 21.4%、hin-総数 39 例中 2 例で 5.1%)に過ぎず、決して多いとは言えない。この点から考えると、風景描写は her-と hin-のプロトタイプ的な用法ではない。

第二に Hier/Origo の導入の整合性はある程度認められるが、用例数の割合にして 40%以上の反例も見られた。反例のパターンは多様であり、これらを説明するには、her-の目標側ないし hin-の起点側に位置する Hier/Origo 以外の概念装置が必要である。

明らかに her-の示す方向の目標側に Hier/Origo を導入することができないケースは heraus と herein において顕著に見られた。中でも最も際立っているのが、herein の例(27)に見られる „Ich muss herein“ という会話文である(瀧田 2019: 28)。これは部屋の外にいる話し手が室内にいる相手に呼びかける会話文で、Hier/Origo の導入先として最も典型的な知覚主体であるはずの話し手は起点側に位置する。屋内への方向を表す herein の例(25)と例(26)においても、話し手及び間接話法の現話者のいる場所は屋外である(瀧田 2019: 27-28)。実際には内部にいない話し手が内部空間側の立場をとって herein を用いるとすれば、2 章の先行研究として紹介した Jahn(1937: 61)が指摘する her-と hin-の効果、すなわち想像によって外界の出来事のある個人に結び付けて体験させる効果(瀧田 2019: 23)も考えられるが、例(25)と例(26)については外界の出来事を体験する個人は目標側には特に設定されていない。また日本語では例(27)の場合「入ってくる」とは言えないが、例(25)と例(26)では可能であろうという点も検討の余地がある。heraus については、Hier/Origo の相当する話し手や中心的な登場人物による見る動作(例 19)、発言行為(例 20)、譲渡行為

(例 21)、Hier/Origo は動作方向の起点側に位置する (瀧田 2019: 25-26)。方向の目標側への Hier/Origo の非導入性が顕著な heraus と herein はともに内外の空間に関わるが、この点も今後考慮に入れる必要がある。

さらに場面の中心の移動を伴う登場人物の移動の方向を表す用例も反例として挙げられる。その該当例は、her-に関しては herab の例(6)のみである (瀧田 2019: 22)。一方 hin-に関しては、hinab の例(38)と(39) (瀧田 2020: 4)、hinunter の例(40) (ibid. 4-5)、hinauf の例(41) (ibid. 5)、hinaus の例(48)～(51) (ibid. 7-8)、hinein の例(66)と(67)と多数で広範囲に及ぶ。これらはいわば Origo の移動であり、3 で紹介した Bühler(1934/1982: 124ff.)による想定上のダイクシスの第二の主要事例「転移 Versetzung」(瀧田 2018: 27) に該当する。

物語冒頭部分で擬人化された廃墟が寂寥の中を見る方向を表す herein の例(28)に関しては、Ehlich(1985: 253) が読者の Origo を導入することにより解釈している (瀧田 2019: 28-19)。また風景描写に関わる hinein の例(62)と(63)においても、場面の描写は起点側に位置する存在の視野に限定されず、目標側に至るまで拡張された光景へ発展しており、読者は場面を見渡すような立場に立たされる。このような読む側の立場は、瀧田(2019: 28-29)で言及したように、Ehlich(1985: 253)による読者の Origo 及び瀧田(2014: 92-93)による聴き手の視点に該当する。つまりこの時読者は現実世界から解放された聴き手として物語場面に介入しつつ、登場人物にも束縛されないことにより物語場面を見渡すことができる超越的な立場をとると解釈することができる。一方、herab の静物の無意志的な動きを表す例(7)と例(8)における Hier/Origo に相当する登場人物の眼前にある髪の動きやろうそくの様子をクローズアップする描写については、読者の Origo 及び聴き手の視点が描写対象に接近するという解釈も成立する。すでに瀧田(2019: 29-30) で説明したように、そもそも Hier/Origo は、物語次元における知覚主体であり、西郷(1975: 73-80, 341)の提唱する「視点人物」、即ち視点を設定された人物に相当し、語り手と聴き手は視点人物を自らの視点のよりどころとして物語状況に関わる。したがって Hier/Origo の導入に関して整合性の低い用例を分析するには、送り手と受け手というコミュニケーション関与者に由来しつつも解放され、また物語の登場人物にも束縛されない別次元の要素、即ち Ehlich(1985: 253)による読者の Origo 及び瀧田(2014: 92-93) による聴き手の視点に該当する要素を取り入れる必要があると考えられる。

今後の課題としては、本論文の分析結果では 40%以上の割合を占める Hier/Origo の導入の反例を検討する。ただしその際には、her-と hin-の中心的な用法が風景描写ではないこと、物語次元における知覚主体としての Hier/Origo の導入の整合性はある程度認められるといった本論文で得られた結論も踏まえる必要がある。こうした前提に基づいて、方向の特徴や Bühler(1934/1982:124ff.)による「転移 Versetzung」のような Origo に関するさらなる概念、読者の Origo 及び聴き手の視点といった別次元の概念装置を取り入れて、分析を行う。

さらに本論文では言及しなかったが、版によって her-と hin-の記述が入れ替わる用例も見られた。なぜこのような相違が生じたのかという問題についても今後の課題としたい。

参考文献

- Alewyn, Richard (1957/1974):** Eine Landschaft Eichendorffs. In: Alewyn, Richard: Probleme und Gestalten: Essays, Insel Verlag, Frankfurt am Main 1974, 203-231. (Erstdruck: Euphorion 51, 1957, 42-60.) (渡辺洋子訳「アイヒェンドルフの風景」『ドイツ・ロマン派論考』1984年, 303-340.)
- Bühler, Karl (1934/1982):** Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache, Fischer, Stuttgart, 1982 (Nachdruck von 1934). (脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子共訳『言語理論 言語の叙述機能 上巻』クロノス, 1983.)
- Ehlich, Konrad (1985):** Literarische Landschaft und deiktische Prozedur: Eichendorff, in: Harro Schweizer (Hg.): Sprache und Raum. Psychologische und linguistische Aspekte der Aneignung und Verarbeitung von Räumlichkeit. Ein Arbeitsbuch für das Lehren von Forschung, Metzler, Stuttgart, 246-261.
- Jahn, Gisela(1937) :** Studien zu Eichendorffs Prosastil (Palaestra Bd.204), Mayer & Müller, Leipzig.
- 西郷竹彦 (1975) :**『西郷竹彦文芸教育著作集 第17巻 文芸学講座(I)視点・形象・構造』明治図書.
- 瀧田恵巳(2014) :**「ダイクシスから見た物語構造」,『言語文化研究 40号』大阪大学大学院言語文化研究科, 83-104.
- 瀧田恵巳(2018a) :**「二つの Origo と視点」,『言語文化研究 44号』大阪大学大学院言語文化研究科, 69-88.
- 瀧田恵巳(2018b):**『『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その1)』『言語文化共同研究プロジェクト 2017・時空と認知の言語学Ⅶ』 大阪大学大学院言語文化研究科, 21-30.
- 瀧田恵巳(2019):**『『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その2)』『言語文化共同研究プロジェクト 2018・時空と認知の言語学Ⅷ』 大阪大学大学院言語文化研究科, 21-30.
- 瀧田恵巳(2020):**『『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その3)』『言語文化共同研究プロジェクト 2019・時空と認知の言語学Ⅸ』 大阪大学大学院言語文化研究科, 1-10.

例文出典

- Eichendorff, Joseph von: Das Schloss Dürande, Philipp Reclam jun. Verlag, Stuttgart, 2011. [略号 **SD**] (渡辺洋子訳「デュランデ城」 前田道介編『アイヒェンドルフ (ドイツ・ロマン派全集第六巻)』国書刊行会, 1983年, 175-228.)